

研究ノート

小学校で英語をどう教えるかー共通教材としての

「英語ノート」と “Hi, Friends!” を中心に

“How Do We Teach English at Elementary School?” Focusing on
“*English Note*” and “*Hi, Friends!*” as Common Teaching Materials

菊池 せつ子

Setsuko KIKUCHI

Abstract

The Ministry of Education and Science noticed ‘the new course of study’ in 2008, introducing ‘foreign language activities’ to grade 5 and 6 pupils at elementary schools for the first time in Japan. Its overall objective follows: To form the foundation of pupils’ communication abilities through languages while the understanding of languages and cultures through various experiences, fostering a positive attitude toward communication.

This paper will examine ‘How do we teach English at elementary schools?’, focusing on “English Note” and “Hi, friends!”, common teaching materials. The former was distributed by the Ministry of Education and Science to all elementary schools between 2009 and 2011, while the latter since 2012 because “English Note” was disused for some reason. Their contents as follows: (1) To experience the joy of communication in the foreign language. (2) To actively listen to and speak in the foreign language. (3) To learn the importance of verbal communication.

Moreover, Consideration should be given the following points when teachers teach English to pupils. The first, when giving pupils opportunities to experience communication in the foreign language, teachers should select appropriate expressions giving consideration to the developmental stages of the pupils and set communication situations familiar to them. The second, when teachers use letters of the alphabet, they have to make effort not to give too much burden to pupils. The third, teachers should enable pupils deepen their understanding not only of the foreign language and culture but also of the Japanese language and culture through language activities.

It is obvious that teachers require more training and support. But finally, it is the home room teachers who should teach English at elementary school because they know pupils’ school or daily lives, they can understand them better. They could achieve the aim of ‘the new course of study’, mainly making teaching programs and conducting lessons making full use of “Hi, friends!”, common teaching materials which are not really a textbook but a basic guide for teachers, together with native speakers (ALT) or local people who are proficient in the foreign language.

Key words : ‘foreign language activities’, “English Note” and “Hi, friends!”, home room teachers

キーワード : 外国語活動、「英語ノート」と “Hi, friends!” 、クラス担任

はじめに

2008 (平成 20 年) 年 3 月 28 日に小学校学習指導要領が告示され、日本の外国語教育史上初めて、小学校に「外国語活動」が導入 (移行期間: 平成 21 年、22 年度、実施: 平成 23 年度より) された。これは、昭和 61 年 4 月の臨時教育審議会「教育改革に関する第二次答申」の「外国語の見直し」にある「まず、中学校、高等学校における英語教育が文法

知識の習得と読解力の養成に重点が置かれすぎていることや、大学においては実践的な能力が付与することに欠けていることを改善すべきである。今後、各学校段階における英語教育の目的の明確化を図り、学習者の多様な能力・進路に適応するような教育内容などを見直すとともに、英語教育の開始時期についても検討を進める。その際、一定期間集中的な学習を課すなど教育方法の改善についても検討する」が出されてから、足掛け 23 年目のことであ

る。

小学校学習指導要領は、2008年1月17日に出された中央教育審議会の答申に基づいて作成されたものである。この答申には、「小学校段階における外国語活動」の中で、「外国語活動」の質的水準を確保するためには、まず第一に、国として「共通教材」を提供することが必要と考えられる。さらに、音声面の指導におけるCDやDVD、電子教具などの活用、僻地や離島などの遠隔教育及び国際交流におけるテレビ会議システムの利用など、ITCの活用による指導の充実を図ることも重要と考えられるとある。

上述したように、文部科学省は中央教育審議会の答申を受け、小学校段階における「外国語活動」の中で、「外国語活動」の質的水準を確保するためには、まず第一に、国として「共通教材」を提供することが必要と考え、「英語ノート」を作成・配布（平成21年～23年度）し、“Hi, friends!”は、「英語ノート」の廃止後、平成24年度より全国の小学校に配布された。本稿では、「共通教材」としての「英語ノート」と“Hi, friends!”に焦点を当て、「英語ノート」の作成と廃止の経緯、そして“Hi, friends!”誕生やそれらの基本理念などに触れ、小学校現場における「外国語活動」の取り組みの中で見えてきた課題を考察し、授業改善に役立つ解決策をまとめてみたい。

共通教材としての「英語ノート」と“Hi, friends!”の位置づけ

先行研究実践校などを除き、平成21～23年度、「外国語活動」に本格的に取り組んだ多くの小学校にとって、「共通教材」として文部科学省が作成・配布した「英語ノート」は大きな支えとなり、平成24年度より配布された“Hi, Friends!”は現場の関係者の拠りどころとなったことは明らかである。我が国初のこれらの「小学校共通教材」（ある意味では現場からの意見を待つ試作教材）はどのような位置づけのものであるのか述べてみたい。

「英語ノート」と“Hi, friends!”の法的な根拠について説明をすると、これらは教科用図書（いわゆる教科書）ではない。教科書とは、学校教育法第34条にある「小学校においては、文部科学大臣の検定を経た教科用図書または文部科学省が著作の

名義を有する教科用図書を使用しなければならない」ものであるが、「英語ノート」と“Hi, friends!”はこれには当てはまらず、同条第2項の「前項の教科用図書以外の図書その他の教材で、有益適切なものは、これを使用することができる」に当たるものである。したがって、法的な使用義務は無いのである。

しかし、「英語ノート」と“Hi, friends!”は小学校学習指導要領に基づいて作成されたものである。一方、中学校の外国語における英語の教科書などは当然、中学校学習指導要領を基に作成され、検定を経て使用されるものである。それぞれ法的な性質は異なるが、ともに学習指導要領を基に作成されている点では同様である。2008年の小・中学校学習指導要領は、小・中学校の目標及び内容において、連携を図りながら作成されたものである。そのため、「英語ノート」を使用することで、中学校の教科書とも自然な指導の流れが期待でき、小中連携にも役立つものと考えられる。その意味でも、「英語ノート」または“Hi, friends!”を使用するほうが良いと思われるが、すでに、地域や学校などで独自のテキストを作成している場合には、学習指導要領の目標や内容と照らし合わせながら、適宜、「共通教材」として、「英語ノート」または“Hi, Friends!”も併用する方法がベターであることは言わずもがなである。

しかし、小学校における「外国語活動」は、道徳等と同じく「領域」であって「教科」ではないので、「英語ノート」も道徳の「心のノート」と同じく教科書（教科用図書）ではなく、その使用を義務付けるものではない。文部科学省研究開発学校や地域の拠点校などでは、「英語ノート」が配布される以前から、試行錯誤の中にも長く英語活動に取り組み、独自のシラバスを作成し、活動や教材を開発して、実行実践を積み上げて来た。そのような学校、地域では、自ら実践して独自シラバスの題材や活動内容と「英語ノート」を照合、比較検討して、必要に応じて欠けている題材や機能を独自シラバスの中に取り込んだり、これまでの実践研究の成果を生かして、「英語ノート」の活動を児童の興味・関心に合うように微修正を加えたりするなどの折衷的な活用研究が行われた。

「英語ノート」の作成・廃止と新教材“Hi, friends!”の誕生経緯

前述したように、中央審議会の答申を受け、新学習指導要領を告示した文部科学省は、全国規模で小学校へ「外国語活動」を導入するにあたり、まず必須である条件整備を行った。そこで、何をどのように指導するのかという条件整備として、同省は、カリキュラム例作成と教材を作成・配布し、教員対象に指導法の研修を実施した。カリキュラム例と教材例としては、「英語ノート」がそれである。「英語ノート」は、教材という機能だけでなく、どのような内容をどのように指導するかまで提案するものであった。学習指導要領の具現化として、希望する学校へ配布し、何をどのように指導すればよいのかという不安を持つ小学校教員の支援を行うことにしたのである。

そこで「英語ノート」は、まず「試作版」が作成され、新学習指導要領移行期1年目に当たる平成21年度に希望する小学校などに配布された。それとともに、これに準拠したデジタル教材、音声CD、指導資料も配布された。この年度に98.7%もの小学校が「外国語活動」に取り組むことを計画し、その半数以上が年間35時間などの設定をしたのには、この「英語ノート」の存在が大きかったと言えるのではないだろうか。

ところが、以上のような様々な条件整備が行われ、これからという矢先に「英語ノート」が廃止になったのである。その理由は、平成21年秋、民主党政権下の行政刷新会議による「事業仕分け」が行われ、文部科学省が提示した「英語教育総合プラン」の予算が廃止と結論されたからである。この中に、平成23年度「英語ノート」、「英語ノート」指導資料、「英語ノート」音声CD教材の印刷・配布の予算が含まれていた。事業仕分けの結果を踏まえて、「英語ノート」は、平成24年度以降は廃止となったが、結局のところ、日本語である母国語も、外国語の指導も両方重要であることは言うまでもないことであり、小学校での「外国語教育」については、専門家の議論により、最終的に、必修となったのである。

研究開発学校や各自治体の指定校などでは、独自の年間計画を立て、教材を作成して「外国語活動」

に取り組んできたが、新学習指導要領全面实施2年目においても、日本全国約24,000校の小学校が、同じように独自に年間計画を立て、教材を作成するに至るまでには、カリキュラム面での支援がまだまだ必要であった。そこで、円滑な小学校での「外国語活動」実施への支援、さらに「外国語活動」の質的水準の担保からも、文部科学省は学習指導要領に沿った「新教材」を改めて作成し提供する必要がある。

さらに、「英語ノート」が3年近く活用される中で課題が出てくるのは当然のことであり、「外国語活動」がより充実するためには、それらの改善が必要であり、事業仕分けによる「英語ノート」の廃止を、小学校の「外国語活動」の改善に向けた機会ととらえ、「英語ノート」の良さを継承し、より使いやすく改良された「新教材」が作成・配布されることになった。

こうして平成23年4月より「新教材」“Hi, friends!”の構想が練られ、作成を開始し年内にほぼ完成した。そして、平成24年1月12日、「新教材」“Hi, friends!”が公にされたのである。その後、平成24年度4月から各校で活用できるように、平成23年末に、児童用冊子“Hi, friends! 1”、“Hi, friends! 2”各1冊、教師用指導書“Hi, friends! 1 (指導編)”“Hi, friends! 2 (指導編)”各1冊、PDF収録ディスク(児童用冊子および教師用指導書の誌面のPDFデータを収録したもの)1枚。さらに“Hi, friends! 1”および“Hi, friends! 2”デジタル教材(DVD)、各1枚がすべての希望する小学校・特別支援学校や、小中連携の観点から各中学校にも送付されるに至ったのである。

「英語ノート」の構成について

まず始めに、「事業仕分け」によって廃止を余儀なくされたが、小学校の「外国語活動」のために、文部科学省が最初に作成し、配布した「英語ノート」の構成について述べてみたい。「英語ノート」は、前述したように、目標、考え方及び内容等はすべて小学校学習指導要領を基本として作成されている。すなわち、「外国語活動」の目標である「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、

積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成をし、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ために作成されたものである。

その際、各レッスン（単元）のテーマや表現、語彙などは文部科学省の委嘱による10数年に及ぶ研究開発学校のデータなどを参考にし、また、全国の小学校で実践されている英語活動などをも考慮しながら選択されている。したがって、奇抜な内容や、小学校段階では高度すぎる英語表現、抽象的な概念の語彙などは使われていない。また、「外国語活動」は、いわゆる「英会話」ではないことから、会話練習にならないような活動を設定するとともに、パターン・プラクティスやダイアログの暗唱に利用されないように構成にも工夫がされている。しかし、この工夫の活用は、指導者によるところが大きいと言わざるを得ない。当然ではあるが、指導者は学習指導要領を順守することが当然の責務であるからである。

「英語ノート」は第5学年1冊、第6学年1冊の計2冊立てである。1冊80ページ仕立てで、後半20ページはコミュニケーション活動に利用できるように厚手のカード類が差し込まれている。レッスンは9つで、各レッスン6ページからなり、初めのレッスンのみが3時間配当であり、他のレッスンは4時間配当で行われるように構成されている。第5学年用の「英語ノート」のイメージは「メルヘン」とし、子供たちを夢のある童話のような世界に誘いたいと考えられている。また、第6学年のイメージは「ファンタジー」とし、学齢も上がり内容も高度になりながらも、言語を通して夢のある世界に引き込むことを意図している。

なお、「英語ノート」の誌面には、コミュニケーションの素地を養うために以下の行動が行われるように組み立てられている。

- (1) Let's Listen : CD を聞きながら、英語の音に慣れ親しむ活動。
- (2) Lets Sing : CD を聞きながら、英語の歌を歌う活動。
- (3) Let's Chant : CD を聞きながら、英語を言い、リズムに慣れ親しむ活動。
- (4) Let's Play : 個人やグループで楽しみながら行

う活動。

- (5) Activity : 皆で行うコミュニケーション活動。
なお、3 レッスンごとに、Let's Enjoy を配し、楽しく英語に触れるページも用意されている。

「英語ノート」のコンセプト（基本理念）

次に「英語ノート」のコンセプト（基本理念）について触れてみたい。

(1) 様々な外国語に触れる

小学校の「外国語活動」では、英語のスキル面のみを向上させることは意図していない。世界には様々な言語があり、英語はその中の1つに過ぎず、現在では、世界で広くコミュニケーションの手段として用いられているものと認識させる必要がある。これは、中学校で本格的に英語を学習する前に、英語が外国語のすべてではなく、言語には優劣がないという認識を持たせることが、国際理解にも役に立つという考えからである。仮にも、子供たちに英語が世界共通語であり、世界で最も優れた言語であるなどとの誤解を生じさせたり、言語に対するゆがんだ意識を植え付けさせたりすることがあってはならないのである。

そこで、「英語ノート」では、様々な言語（フランス語、ロシア語、スアヒリ語、中国語、韓国・朝鮮語、ポルトガル語、ヒンディー語、モンゴル語、アラビア語、スペイン語など）に触れさせるとともに、ハングル文字、タイ文字、アラビア文字などにも触れさせるように構成されている。様々な言葉に触れることによって、小学生が言葉に対して興味と自信を持ち、「外国語活動」に積極的に取り組むようになることを願っているのである。

(2) 国際理解に役に立つために

様々な小学校での英語活動を見ていると、10月ともなれば、お決まりのようにカボチャに目鼻を彫り、お化けの衣装を準備してハロウィーンを楽しむ。3月ともなれば、卵に色をつけて、イースターを祝う。これは、上述した「様々な外国語に触れる」という観点から言うと、偏っており、国際理解と呼ぶべきものではなく、単にアメリカの文化紹介であり、極端な場合、アメリカの文化

礼賛につながりかねない。国際理解とは文化紹介だけに止まったり、偏った考え方に立ったりして指導することは望ましくないと言える。

そこで、英語圏以外の文化にも体験的に触れ、多様性に気づかせるために、小学生が衣服や食などの生活に身近な事柄について、世界には様々な見方や考え方があることを知り、国際感覚の基盤を培うことが大切と言える。

(3) 日本の文化を知るとともに、発信を目指す。

いまどきの小学生は、クリスマスやハロウィーンは知っていても、七五三や茶道、華道などは知らないことが多いように思われる。このようなことから、教育基本法の第2条5号「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」から、中央教育審議会答申の「中学校段階の文法などの英語教育を前倒しするのではなく、国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深める」ことにつながり、学習指導要領の「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気づくこと」へと結実させることが大切である。これにより、「英語ノート」では、漢字を扱ったコミュニケーション活動や、漢字の造りに注目させる活動、日本の行事とその月名とを結びつける活動など、様々な工夫がなされており、体験することで気付かせるようにしている。これらの日本の習慣・行事などを指導する場合には、ネイティブ・スピーカー(ALT: 英語補助教員)に任せるだけでなく、クラス担任の先生が前面に立って指導することが求められる。また、子供たちが、日本の行事や漢字をネイティブ・スピーカーに伝えそして教え、発信するなどの活動も面白いと思われる。

(4) 現代の課題に対応する。

他にも下記のような、様々な現代の課題についても学べるように配慮されている。

- ① 家族の絆を大切にする: 希薄になりつつある家族の関係を、家系図を通して、自身の存在の大切さに気づく。
- ② 生活を見直す: 世界の同世代の子供たちの生活に触れることで、自身の生活を見直す。

③ キャリア教育に資する: 様々な職業を知り、将来就きたい職業を考えながら、勤労意欲を引き出す。

④ 創作力の向上を図る: 子供たちが、自由な発想で、物語を作り、発表する活動を通して、考える力を伸ばす。

「英語ノート」は、以上のねらいを基に、題材化し、子供たちが、自分の立場で英語を使ってコミュニケーションを体験する活動が設定されている。そして、子供に言葉でやり取りする楽しみを感じさせながら、積極的にコミュニケーションをとる態度をも育成することも目的としている。

「英語ノート」の特長と使用法

前述したように、「英語ノート」は教科書ではない。したがって、使い方には様々な工夫が考えられる。もちろん、教科書のようにレッスンごとにページを追って指導する方法もあれば、すでに、学校や地域で作成しているテキストと整合性を取り、子供たちにウケがよいレッスンや、伝えたい内容が含まれているレッスンを取り上げて指導する方法もある。また、「英語ノート」は6年生のレッスン1及びレッスン2で取り扱うアルファベットを、中学校との連携を図る観点から、3学期に振りかえ、文字を小学校から中学校にかけて、連続して指導するカリキュラムを作成することもできる。つまりは、指導は自由なのである。

しかし、6年の修了段階では、学習指導要領の目標を達成していることが求められる。「英語ノート」を使わなくても良いと思ひ込み、自由に指導することで、コミュニケーション能力の素地を養うこともできず、中学校の負担を増やすことは避けたい点である。あるいは、学習指導要領に適なさいようなテキストを購入して指導したり、学習指導要領上、中学校での指導内容とされるフォニックス(初歩的なつづりと発音の関係を教えること)を取り入れたら、また文字を正確に書けるようにするなどの行為は行き過ぎた指導と言わざるを得ない。

子供たちに何が欠け、何が求められているかを正しく判断し、指導することが求められる。そのための支援教材としての「英語ノート」なのである。

「英語ノート」の特長は次のようになっている。

(1) 小学校で指導すべき表現と語彙の明示、取り扱うべきテーマと活動の例示

「英語ノート」を通して、小学校で体験的に児童に触れさせたい表現や語彙が初めて明示された。概して言えば、中1から中2の1学期に学習する文型文法事項に、文法用語を使った明示的説明や構造理解を排して、あくまでも聞き、話す活動の体験を通して触れ、コミュニケーションへの意欲を高め、言葉への気付きとともに理解力・発信力の素地を養う、と捉えればよさそうである。また、「世界の‘こんにちは’を知ろう」、「ランチメニューを作ろう」、「行ってみたい国を紹介しよう」など、児童の興味・関心を引くテーマの例と具体的な活動例が示されたことも授業設計や指導の大きな参考となり、「英語ノート」の特長の一つと言える。

(2) 「英語ノート指導資料」で指導細案を提示

指導計画の作成や授業の立案と実施に責任をもつのは小学校のクラス担任である。「英語ノート」には、各科のねらいと指導計画、各時間の具体的な指導手順と活動の進め方などの例とともに、各時間の指導案（教師の児童への日本語及び英語での指示を含む指導細案）が掲載された「指導資料」が用意されており参考になる。

(3) 「電子黒板ソフト」を含む視聴覚教材の提供

「英語ノート」には、準拠の音声CDはもとより、「電子黒板ソフト」も提供されている。このソフトを使えば、登場人物のイラストが口や体を動かして会話をしたり歌ったりする動画を見ながら、チャンツ（詠唱、唱和）や歌をリズムに乗って練習できるし、リスニング活動では、英語を聞きながら絵と絵を線で結んだりすることができる。これを活用すれば練習や活動が俄然楽しくなるであろう。電子黒板がなくても、パソコンとプロジェクターがあれば、児童が直接黒板に触れて操作することを除き、ほぼ同じ機能を使用することができる。

新教材“Hi, friends!”の構成とコンセプト（基本理念）について

一方、「事業仕分け」によって廃止せざるをえなくなった「英語ノート」に代わって、作成された新教

材“Hi, friends!”は「この地球に住む誰もが、笑顔で挨拶できれば、平和な世界がやってくるのではないか」という思いで、テキストの題名“Hi, Friends!”と名付けられたという。これからの世界に生きる子供たちに、言語は、人と分かりあい、理解し合うためのコミュニケーションの道具だということを、「外国語活動」を通じて実感して欲しいという願いからである。そのコミュニケーションの第一歩が挨拶であり、誰もが笑顔で挨拶できるように、そして挨拶を通して友達になって欲しいという思いがこの題名に込められている。

“Hi, friends! 1”の表紙には、5人の子供たちが船に乗って世界へ旅立つ様子が描かれ、“Hi, friends! 2”の表紙にはこの日本の子供たちの他に、仲良くなった外国の子供たちが数人乗っている様子が描かれている。彼らは一緒に目的地に向かって旅をしながら様々な体験―楽器の演奏をしながら歌を歌う、サッカーをする、子ども同士でインタビューする活動、など―をしていくという内容になっている。

小学校5、6年生の2年間の「外国語活動」で、外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさをたっぷり味わった子どもたちは、外国語に出会い、日本語と比べることで言葉の面白さや豊かさに気付く、外国の文化に出会うことで、自分たちの住む国の文化の良さ、自分たちの地域の素晴らしさに改めて思い直し、身の回りの人たちへの感謝を感じて欲しいという願いを込めて作成されている。

自分たちの住む地域を出発した子供たちが世界の子供たちと友達になり、様々な世界を知り、最後には自分たちの住む地域に戻ってくるのは、子供たちには、広い世界を知り、自分の住む国や地域、そしてその文化を大切にできる人になって欲しいという思いからである。自分自身や、自分たちの住む地域、自分の住む国や文化を大切にしてこそ、他の人や、世界の国々を大切にできると考えられるからである。日本語も外国語も、自分たちの地域や国の文化も外国の文化も大切にする、国際人としてしなやかに生きて欲しいという思いからである。

先行の「英語ノート」について、これまでの実践を通じて、様々な良さや課題が指摘されているが、まとめてみる。良い点は、①個人配布のため、子供

が書き込みをしたり、一人ひとりの学習の足跡になったり、評価の際の参考にしたりすることができる。②児童用の絵カードが巻末についており、教材として適している。③準拠したデジタル教材があり、子供の興味・関心を高めることができる。④子供が楽しめる様々なゲーム等が設定されている。一方、課題としては、①丁寧な指導案に沿って授業がしやすい半面、細かすぎて活用しにくい。②設定されている活動が高学年には簡単であったり、または難しかったりする。③単元末に設定されている活動にスピーチが多く、コミュニケーションにつながりにくい。④特別な支援を要する子供に使いやすい教材の提供が望まれるなどである。

上記を踏まえ改善された、“Hi, friends!”の具体的なコンセプトは次のようである。「教材」に関しては、①小学校学習指導要領の「外国語活動編」に記載されている目標、内容などの具現化の一例であることから、学校や教員が、子供の実態に合わせて活用する「外国語活動」教材であることを踏まえる。また新学習指導要領では、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、道徳の内容について、「外国語活動」の特質に応じて適切な指導をすることが求められていることを考慮する。②子供に負担のない活動の流れにする。③単元末に、出来るだけペアやグループでコミュニケーションを図る活動を設定する。④単元の時数や児童冊子の各単元ページ数は題材に合わせて設定するなどである。

一方、「児童用冊子」については、①児童一人ひとりに配布する。②教材冊子に児童用絵カードを添付する。③「活動」で使う誌面作りにする。④小中連携を踏まえ、中学校英語科の授業でも活用できる誌面作りにするなどである。

「補助教材」については、①学習指導要領では、「授業の実施に当たっては、ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど、指導体制の充実すること」としているが、地域によって、ネイティブ・スピーカーの来校頻度は様々である。そこで、ALTなどのネイティブ・スピーカーが年間を通じて（ほとんど）来校しない学校のことも踏まえて、ネイティブ・スピーカーの口元などの拡大映像を収録する。②言語や文化について体験的に理解

を深めるきっかけとなるよう、外国の風景や生活などの動画を収録する。③各単元で設定されている語彙や表現が、実際の生活でどのように使われるのかを知ることで、よりコミュニケーションへの意欲が高まるよう、教室の子供と同年代の子供たちが設定された表現などを使ってスキットを演じている動画を収録する。④教員がアレンジでき、小中連携を踏まえ中学校でも活用できる絵カードを搭載する。⑤子供が自分の思いを十分表現できるよう、冊子で扱っていない語彙も扱った絵事典を収載する。⑥チャンツや歌は、子供たちの実態に応じて楽しめるよう、カラオケバージョンを加えたり、歌詞などを選択可能にする。

さらに、“Hi, friends!”の特色の一つは、「英語ノート」では収録されていなかった絵本を収録したことである。昔話の絵本「桃太郎」を題材にした活動をきっかけに読書への興味を高めることにつながることも期待されている。この物語の中で、桃太郎たちが **strong, brave, friends** 繰り返し言うが、これらの語彙は、これからの国際社会を主体的に生きていくための必要な資質の一部と考えられる。様々なことに取り組む挑戦的な勇氣、粘り強さ、そして、世界の人々との共生を表しているかのようである。

小学校英語における文字指導について

小学校の「外国語活動」における課題の一つである、文字を無理なく導入するには、どのようにすればよいだろうか考えてみたい。公立小学校の「外国語（英語）活動」における文字指導は、「アルファベットなどの文字や単語の取り扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いる」と新学習指導要領で述べられている。文字の取り扱いについては様々な意見があり、中学英語の前倒しになるのではと危惧する声もあるが、実際に、中学校への橋渡しとして児童の興味を生かしながら学習に負担なく「音声によるコミュニケーションを助けられる」文字や単語を取り扱うにはどうすればよいのだろうか。公立学校でも行える児童に無理のない文字導入の在り方を考えてみたい。

児童を対象とした英語の文字指導には、①アルフ

アベットの名称 (names) 、②アルファベットの形 (shapes) 、③アルファベットの音 (sounds) 、の3つの側面があり、指導の際には、これらを混同してはいけないとされている。

(1) 「アルファベットの名称指導」

ABC ソングを歌う、アルファベットカードでカルタ取りをする、アルファベットの文字を順番につないでいく、「英語ノート 2」に最初の2単元で紹介されているような活動である。その指導書に、「アルファベットを聞いて、どの文字か分かるということがこの単元の最終目標である」と書かれているように、目的は、アルファベット26文字の名称(及び正しい呼び名)が分かるようにすることにある。

(2) 「アルファベットの形の指導」

読み書きに必要な活字体(あるいは筆記体)を学ぶことである。国語の「書写」の指導のように、こうした活動が得意な子もいればとても苦手な子もいて個人差が大きい。小文字bやjを鏡文字のように反対に書く子も少なくない。ただ、コミュニケーションを中心に指導する小学校の指導現場では、こういった書写指導に多くの時間を割くことは望ましくないとされる。

(3) 「アルファベットの音指導」

アルファベットの文字と音を結び付ける指導である。Cameron (2001) は、この文字指導が児童を対象とした文字指導の中では最も重要であり、音と文字の関係を理解することが将来的に英語の読みの力をつけることになるとしている。

上の3つの文字指導の中で、(1)の名称指導ですでに始めている公立小学校は数多い。しかし、最重要とされ、中学校の読みにつながる(3)の音の文字指導はそのルールの複雑さから児童に過大な負担を与え、そのことで「英語嫌い」を作るのではないといった懸念から小学校の現場で推奨されていない。しかしその複雑なルールを扱うのではなく、新学習指導要領の目標である「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」活動の1つとしてたくさんインプットを与え、そのことから無理なく自然に文字と音の結びつきへの気づきを促せないものだろうかと考えられている。

小学校の「外国語活動」は誰が指導するのか―クラス担任の役割について

次に重要な課題となっている、小学校の「外国語活動」を誰がするのかということについて考えてみたい。2011年(平成23年度)から移行措置期間の先行実施として始まった小学校の「外国語活動」は全国の公立小学校の約99%で実施され、その半数以上は年間35時間以上であるという。しかし、実際に始めてみると、初めての取り組みに戸惑い、困惑し、情報を求める現場からの声も少なくないのが現状である。

「指導資料」には各時間の指導細案が掲載され、指導者(担任・ALT)のための使える英語が記されているが、概して指導案のレベルは高く、英語専門でなく「外国活動」の指導経験も少ない担任には難度が高いと思われる。また、ALTやサポーター(ES: 英語に堪能な地域人材)とのティーム・ティーチング(T.T.)を毎時間確保できない地域では、担任にかなり負担がかかることは否めない。さらに大きな問題は、児童が一斉に行うペアやグループ活動などのある程度の自由度を与えた創造的な活動の場合、子供たちの表現意欲にいかに対応して助言するかも難題である。このような子どもに応じた指導にはある程度の教育の専門知識が必要で、ALTやESがいるからといって必ずしも一任できるものではない。

中核教員研修を実施し、その研修を受けた教員が所属校で研修を企画運営するといったピラミッド型研修に留まらず、長期計画のもと、より広範囲なクラス担任のための指導法研修の実施が望まれる。また、これには小学校英語の教科化が前提となるであろうが、将来的には真の「中核教員」として小学生に外国語を指導することを中心に学んだ小学校教員の養成も必要だと思われる。

誰が小学校の「外国語活動」を行うべきか。結論から言えば、「クラス担任が中心になって進めていく」であろう。新学習指導要領では、「指導計画の作成や授業の実施については、学級担任の教師または「外国語活動」を担当する教師が行うこととし、授業の実施に当たっては、ネイティブ・スピーカーの活用にも努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な人々の協力を得るなど、指導体制を充実す

ること」(第3.1.5)と明記されている。

次に、小学校の「外国語活動」をクラス担任が中心となって進めていくべき理由と、小学校の「外国語活動」を学び始めた教員がALTとうまくチーム・ティーチングとしていくための配慮すべき点を、クラス担任の特性という視点から述べてみたい。

まず理由であるが、小学校の「外国語活動」の目標を達成するためにはクラス担任の特性が重要である。「小学校外国語活動」の目標として「小学校学級活動研修ガイドブック」では、指導者に求められることとして以下の③点を挙げている。

- ① 児童の発達段階を踏まえ、興味・関心を抱くような学習内容と活動を設定できること。
- ② 積極的にコミュニケーションと図ろうという気持ちを起こさせることができること。
- ③ 英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることができること。

この①と②から児童の実態をよく理解しているクラス担任の存在が欠かせないことが分かる。

実際のクラスには本当に様々なタイプな児童がいる。担任はそれぞれをよく理解した上で、クラスを目標に向かうことができる学習集団としてまとめていかなければならないのである。児童が知的好奇心を満たし、楽しく学習できるようにするためには、児童の実態や学習履歴、地域人材などを踏まえて指導計画に一工夫も二工夫も加えられる存在が大切であり、それはクラス担任であると言える。

まとめ

学習指導要領の改定では「言語活動の充実」がキーワードとなっている。「外国語活動」も学校の教育活動の中で特別扱いされるべきものではなく、言語活動の充実という枠の中でとらえるという視点が大切だと考えられている。未来に生きる思考力、判断力、表現力をつけるために、他と関わり、聴いて、考えて、つなげるといった言語活動を核にした学習へとシフトさせようとする教育の流れの中で、「外国語活動」をどのように展開していくべきかを考えなければならぬと思われる。

小学校の「外国語活動」においては、「英語ノート」の課題を踏まえ、新「共通教材」としての「Hi,

friends!」と補助教材のCDなどをフル活用しながら、クラス担任が、一生懸命英語で伝える姿を子供たちに見せて、子供たちに対する学習者モデルになればそれで良く、必ずしも優れた英語のモデルでなくても良いというのが最近の論調である。英語力が無くても言いわけではないが、不安や劣等感が募ってしまうと逆効果になる恐れがあるので英語力が必須であると強く考えすぎることではない。

しかし、これからの小学校の先生にとって、できる範囲での英語の力を身につける努力は必要であると思われる。初めて英語を教えなければならない小学校の教師にとって、最も大切なことは、「実生活で必要性のある英語」を学ぶということである。小学校の先生にとって実生活で必要な英語とは、どのような英語なのだろうか。それは、海外旅行の英語やビジネス英語だろうか? 小学校の先生たちにとって本当に実生活で必要性のある英語とは、言うまでもなく、「授業で使う英語」である。つまり「指導教材の英語表現」や「教室英語」である。まずは、それらを優先して身に付ける努力が必要である。小学校外国語に最もふさわしくないのは、英語について説明ばかりしたり、誤った英語を厳しく直したりすることである。大切なことは、教師が「さりげなく」正しい英語を示し、子供が自然に吸収して行くことが理想であると言える。

「外国語活動」を進めていくと、話すことが苦手な活動に対して消極的な子供や恥ずかしがってなかなか活動に参加できない子供も出てくるであろう。そのような子供たちへの指導のキーワードは「わかること」「安心させること」「自信を持たせること」である。授業の中では教師は「話そうとするモデル」である。教師が英語や日本語やジェスチャーを使いながら、笑顔で元気に話そうとすることが子供たちの活動への意欲につながっていく。英語だけでなく日本語でのコミュニケーションを大切にしていくことが重要であろう。クラスの中で消極的な児童に対して、教師がきちんと励まし、ちょっとした喜びや小さな心の変化を認めてあげることが大切であると思われる。

「外国語活動」に限ったことではないが「褒める」ことが非常に良いことである。英語を使って、ジェスチャーを交えながら表情豊かに気持ちを込めて褒

める。英語を使って短い言葉で表情豊かに褒めてもらうことで、子供たちは自信を持ち、積極的に活動しようという意欲が持てるようになる。どんな小さなことでも良いので、褒めることが子供の安心と自信につながるはずである。

最後に、大切なことは、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成をし、コミュニケーションの能力の素地を養うこと」であり、これが小学校「外国語活動」の目標であるから、英語が上手に話せなくても、少しくらい間違っても良いのである。子供たちが人とのかかわりを楽しみながら、コミュニケーションを図る楽しさと大切さを学んでいくことこそ、「外国語活動」の目指すところなのだとすることを忘れることなく、授業を組み立てていくことが大切なのではないだろうか。

【参考文献】

- 1) アレン玉井光江 (2010) 『小学校英語の教育法—理論と実践』大修館書店
- 2) 植松茂男「小学校英語活動の長期的な効果について」(2013)『第52回JACET 全国大会要綱』、43-44
- 3) 菅正隆 (2012) 『外国語活動を徹底サポート!“Hi, friends!” 指導案&評価作りパーフェクトガイド』(成功する小学校英語シリーズ5) 明治図書。
- 4) 菅正隆・梅本龍多共著 (2009) 『小学校外国語活動「英語ノート」対応電子黒板活用ガイドブック』旺文社。
- 5) 西田理恵子「小学校外国語活動における児童の動機づけと情意要因の縦断的变化：クラス要因を視野に入れて」(2013)『第52回JACET 全国大会要綱』、100-101
- 6) 樋口忠彦・大城 賢・國方太司・高橋一幸編著 (2010) 『小学校英語教育の展開—よりよい英語活動への提言』研究社。
- 7) 高木亜希子他3名「小学校外国語活動のための教員養成」(2009)『第48回JACET 全国大会要綱』、92-93
- 8) 直山木綿子 (2013) 『小学校外国語活動のあり方と“Hi, friends!”の活用』東京書籍
- 9) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』(2008) 東洋館出版社。
- 10) 文部科学省 (2008a) 「英語ノート指導資料 第5学年 試作版」文部科学省。
- 11) 文部科学省 (2008b) 「英語ノート指導資料 第6学年 試作版」文部科学省。
- 12) 文部科学省 (2008c) 「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」東京書籍。
- 13) 文部科学省 (2009) 「英語ノート 1」教育出版。
- 14) 文部科学省 (2009) 「英語ノート 2」教育出版。
- 15) 文部科学省 (2012) “Hi, friends! 1” 東京書籍
- 16) 文部科学省 (2012) “Hi, friends! 2” 東京書籍
- 17) 吉田研作 (2008) 『21年度から取り組む小学校英語—全面实施までにこれだけ は』教育開発研究所。
- 18) Cameron, L. (2001). *Teaching Language to Young Learners*. Cambridge University Press.